

<研究ノート>

東洋的道德観に基づいた道德教育の指導法についての試論

－儒教・仏教からのアプローチ－

安次 嶺 勲

キーワード：孝の理論、法界縁起、諸法実相、ホリスティック教育、デス・エデュケーション

1. 目的

『2002年版 子ども白書』⁽¹⁾では、そのテーマを「人間回復のための“つながり・ぬくもり”」としているが、そのテーマを掲げた背景には、コンピュータ・映像メディア・ファミコンゲーム等の疑似体験メディアの普及により、子どもたちはヴァーチャルな世界へ逃避し、その結果、各々が孤立し、生身の人間との連帯感や生命への畏敬の念がうすれつつあるという現実がある⁽²⁾。本稿では、東洋の伝統的道德思想を代表する儒教・仏教的観点から、現代の社会状況にも対応できるような道德観について考察し、それに基づいた道德教育の指導法を提案することを目的とする。

2. 方法

特に、加地伸行著『儒教とは何か』⁽³⁾や立川武蔵著『日本仏教の思想』⁽⁴⁾を手がかりに、「まごころ」「思いやり」「生命の大切さ」や「生きとし生けるものを敬う心」「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」といった『小学校学習指導要領』の内容項目にも適用可能な道德的意義を提示し、それらを道德教育の指導に活かすための方法を考察する。また、諸外国における教育法についても併せて考察する。

3. 『小学校学習指導要領』の内容（本論で扱う範囲）

道德、[第5学年及び第6学年] の内容⁽⁵⁾

- 2 主として他の人とのかかわりに関すること
- 3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること

2－(1) 時と場所をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。

2－(2) だれに対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする。

2－(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。

3－(2) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を大切にする。

3－(3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。

- ・『指導要領』2－(1) (2)、3－(2) は、それぞれ、儒教における「忠（真心）」「恕（思いやり）」という徳目と結びつけて考えることが可能である。儒教では、この「忠」「恕」が「仁（他人への愛）」に基づき⁽⁶⁾、さらに「仁」は「孝（父母への敬愛）」に基づくとする説がある⁽⁷⁾。しかし、加地氏はこのような「孝」の考え方は不十分とし、自ら画期的な「孝」の理論を提示

する。

3.1. 儒教的観点から－「孝」の本質＝生命論－

3.1.1. 招魂再生の儀礼から「孝」の理論へ

招魂再生

祖霊（魂魄）を尸としての自己（特に、祖父からみて孫にあたる人）に招き寄せ、祖先（過去）と自己とが一体となるという儀礼。この儀礼を行なうことにより、「祖先（過去）－自己」間の生命の連続性が可能⁽⁸⁾。後に、この儀礼が祖先崇拜へ。

(1) 重要になる行為＝招魂再生の儀礼→祖先崇拜

3.1.2. 招魂再生の理論化＝「孝」の理論

「孝」の理論

招魂再生の儀礼に基づいた祖先と自己との生命の連続という考え方を「父母（現在）－自己」間にも適応。

(2) 重要になる行為＝父母への敬愛

- ・祖先と自己との間の生命の連続を考えると、その連続の中にいる自己にとって、最も直接的に関係するのが父母である。そこで、父母への敬愛という行為によって父母と自己との間の生命の連続が可能。

この生命の連続を「自己－子孫（未来）」間にも適応。

(3) 重要になる行為＝子孫を残すこと

- ・自己もいつかは死んで祖霊となる。その際、自己に子孫がいれば、その子孫が招魂再生を行なうことによって自己もこの世に帰ってこれる、つまり、自己と子孫との間の生命の連続が築ける。つまり、子孫を残すという行為によって自己と子孫と間の生命の連続が可能となる。以上(1)(2)(3)をまとめて「孝」という⁽⁹⁾。

(1) 招魂再生の儀礼行為（のちに祖先崇拜）	└──────────┘ ─────────── 「孝」
(2) 父母への敬愛という行為	
(3) 子孫を残すという行為	

- ・以上が「孝」の理論である。この理論によって「自己の生命とは、実は父の生命であり、祖父の生命であり、さらに、実は遠くの祖先の生命ということになり、家系をずっと遡ることができることになる。いまここに自分があるということは、実は、百年前、確かに自分は生きていたことでもある。百年はおろか、千年前、一万年、十万年前にも、ひいては生命のもとであったところまで遡って自己は確かに存在していたことになる」⁽¹⁰⁾のであり、「自己の生命が永遠であることの可能性に触れうる」⁽¹¹⁾ 言い換えるなら「孝」の理論とは「過去・現在・未来を

貫く生命の連続」⁽¹²⁾を説くものといえる。さらに加地氏は、この「孝」と「仁（他人への愛）」と結び付け、他者との生命の連携を説き、さらに、「孝」の考え方を根底で成立させているものを死の自覚⁽¹³⁾とする。

3.1.3. 道德教育の指導への応用

- ・この生命論に基づけば、子どもが「どうして自分の身体を傷つけてはいけないのか」「どうして親を殴ったり、傷つけてはいけないのか」と質問した場合に、道徳的に根拠づけて答えることができる。さらに「生命の連続」を主題とした教材を使って生命の重要性をこの生命論の観点から指導することも可能である。

3.2. 仏教的観点から(1)－「調和」を説く法界縁起－

3.2.1. 「調和」「命のつながり」を説く法界縁起

『指導要領』2－(5)の項目内容を華厳仏教における「法界縁起」⁽¹⁴⁾という観点から考察する。

法界縁起

「個物がそれぞれ独立していながら、しかもたがいに融和し、調和している」。⁽¹⁵⁾ そのような「現実の個物の密接な関わり方、関係性を説いた」⁽¹⁶⁾ ものであり、「世界に存在するあらゆるものがおたがいに相手の存在を認めながら、しかもそれがお互いに調和をしてゆくという」⁽¹⁷⁾ 考え方。

- ・この華厳思想における法界縁起は法性思想に位置づけられており、同思想の説く「諸法実相」という考え方を支えている。この考えはまさに2－(5)の項目内容に適している。

3.2.2. 道德教育の指導への応用

華厳思想ではこの法界縁起を自覚するために内的実践を重視する。内的実践とは瞑想である。つまり、この世界が法界縁起で成り立っていることを瞑想を通じて自覚するのである。瞑想を直接小学生に指導することには違和感があるかもしれないが、イメージ・トレーニング、集中力の育成といった観点から道德教育の指導法として取り入れることはできる。例えば、アメリカ・カナダを中心に展開しているホリスティック教育や⁽¹⁸⁾、早期からの右脳教育を提唱している七田眞氏の教育論⁽¹⁹⁾で七田氏は子どもへの道德教育として「徳育」を奨励し、イメージ力を高める実践法の一つとして瞑想が積極的に取り入れている。

3.3. 仏教的観点から(2)－アニミズムと諸法実相の融合－

3.3.1. 日本文化の基底にあるもの＝アニミズム

『指導要領』3－(3)項目内容を「諸法実相」という観点から考察する。

アニミズム

霊魂などの霊的、超自然的、神秘的なものが存在して、自然、人間に重大な影響を及ぼすという世界観。自然物・自然現象を神聖なるものとみる精霊崇拜。

- ・立川氏は、このアニミズム的要素が日本文化の基底にあるとみる⁽²⁰⁾。

諸法実相

現象としてのあらゆる存在は、そのまま真実在のあらわれであること。存在するものすべてが真実の相であるということ。

3.3.2.アニミズムと諸法実相の融合

『日本化した仏教の特色は、「諸法実相つまり、森羅万象が実相（真実のすがた）である」ととらえたことだ。眼前にある樹木や岩が、さらには人間の身体が、「そのまま」真実のすがたを示しているというのである。このような考え方は、樹木や岩に霊や神が宿ると信じたり、樹木などがそのまま御神体であると信じたりする崇拜形態と似ている。というよりも、そのような精霊崇拜を母胎として、「諸法実相」の哲学は育ったと思われるのである。』⁽²¹⁾

精霊崇拜→諸法実相→両者の融合

- ・立川氏は、アニミズム的要素を日本文化の基底とみなし、そのアニミズムと諸法実相という仏教思想の融合が日本仏教の根底にあると考えている。ともあれ、諸法実相とは、現象としてのあらゆる存在をそのまま真実在のあらわれとみるのであり、それを聖なるものとみるという思想である。この点で、『指導要領』3-(3) 項目内容を根拠づける道德観として有効である。

3.3.3. 道德教育の指導への応用

この「諸法実相」という考え方は、日本の大乘仏教のすべてに通底しており、本稿 3.3.で取り上げた法性思想にも通じる。したがって、実践法としては瞑想という内的実践法をとると考えられる。

4. 本稿全体を通じて重要なこと

本稿では、生身の人間との連帯感や生命への畏敬の念という観点から考察を進めてきたのであるが、最後に、このような観点を支えるのに不可欠な要素として「死の自覚」を提示したい。上述したように、加地氏も「孝」の理論を支える要素として「死の自覚」を重要視している。また、子どもたちに、「すべての存在をそのまま真実在のあらわれとみて、それを聖なるものとみる」といった情緒を育ませていくためにも「死の自覚は必要である」と考える。ところで、子どもたちに「死の自覚」を通じて生の大切さを自覚させ、また、命のつながりを自覚させるための教育法は日本においてよりも、むしろ、欧米を中心に近年盛んに取り入れられている。例えば、「デス・エデュケーション（Death Education）」⁽²²⁾である。「デス・エデュケーション」とは、1960年代の初頭に欧米で始まった教育論である。この時期から欧米では死を見直すという動きがさかんになり、昨今のアメリカでは小学校のカリキュラムの中にも取り込まれている⁽²³⁾。この教育には（1）死やその周辺のことを正確に学ぶこと、（2）いのちや生きることについて肯定的な価値観を形成すると同時に具体的態度を身に付けさせること、という二つの目的があり、いわば、「死」を通じて「生」を自覚させてゆく教育法である⁽²⁴⁾。このような教育法を積極的に導入することで、多少なりとも子どもに、生きることの大切さ・生命の連続感・聖なるものへの畏敬の念を抱かせることができるのではないかと考えたい。

注と出典

- (1) 『2002年版 子ども白書』 日本子どもを守る会編、草土文化、2002（以下『子ども白書』とする）。
- (2) 『情報社会の子どもたち』 小川信夫著、玉川大学出版部、1993、pp.49-70。
- (3) 加地伸行著『儒教とは何か』 中公新書、1990（以下、『儒教とは何か』とする）。
- (4) 立川武蔵著『日本仏教の思想』 講談社現代新書、1995（以下、『日本仏教の思想』とする）。
- (5) 『小学校学習指導要領』 文部科学省編、2004、p.93。（以下、『指導要領』とする）。
- (6) 金谷治著『論語の世界』 pp.140-142。
- (7) 桑原隲蔵著・宮崎市定校訂『中国の孝道』 講談社学術文庫162、1977、p.45。
- (8) 『儒教とは何か』 pp.16-18。
- (9) 『儒教とは何か』 p.19。
- (10) 『儒教とは何か』 p.20。
- (11) 『儒教とは何か』 p.21。
- (12) 『儒教とは何か』 p.68。
- (13) 『儒教とは何か』 p.60。
- (14) 『仏教の思想6 無限の世界観＜華嚴＞』 鎌田茂雄・上山春平著、角川書店、1969（以下、『仏教の思想』とする）。
- (15) 『仏教の思想』 p.99。
- (16) 『仏教の思想』 p.99。
- (17) 『仏教の思想』 p.94。
- (18) ホリスティック教育とは「調和」「命のつながり」を重要視する教育論であり、カナダ・アメリカを中心として盛んになりつつある。ホリスティック教育とは「<かかわり>に焦点を当てた教育である。すなわち、論理的思想と直観との<かかわり>、心と身体との<かかわり>、知のさまざまな分野の<かかわり>、個人とコミュニティとの<かかわり>、そして自我と<自己>との<かかわり>など。ホリスティック教育においては、学習者はこれらの<かかわり>を深く追究し、この<かかわり>に目覚めるとともに、その<かかわり>をより適切なものに変容していくために必要な力を得る」（『ホリスティック教育』ジョン・P・ミラー著、春秋社、1988、p.8、以下『ホリスティック教育』とする）と定義されている。また、ホリスティック教育ではその実践法の一つとして瞑想を取り入れている（『ホリスティック教育』p.276）また、ホリスティック教育の実践面については、『実践ホリスティック教育』ホリスティック教育研究会編、柏樹社、1995、参照。
- (19) 七田氏は、人間にとって最も大切なものを徳とみなし、その徳を育てゆくことを「徳育」と考える（『七田式子育て心理論 警告 間違った子育てが家庭を崩壊させる』七田眞著、文芸社、2001、pp.139-155）。また同氏は右脳学習法の6つのステップの一つとして瞑想や呼吸法を取り入れている（『どんな子でも必ず超優秀になれる！』七田眞著、株式会社フォー・ユー、1995、pp.93-98）。
- (20) 『日本仏教の思想』 p.8。
- (21) 『日本仏教の思想』 p.11。
- (22) Robert Fulton, DEATHAND DYNING:challenge and change, San Francisco, 1981。
『デス・エデュケーションー死生観への挑戦ー』 ロバート・フルトン著／斎藤武・若林一美訳、現代出版、1984（以下、『デス・エデュケーション』とする）。
- (23) 『デス・エデュケーション』 p.301。
- (24) 『子ども白書』 pp.192-193。